

秋山の例会に参加して 「大秋山部落の滅亡について」

野口スナオ（木島平村）

天明の飢饉は、東北地方に多大の桧垣を与え、江戸時代の四飢饉とも言われるほどの大きな飢饉であったことも、皆様の御承知の通りである。

さてこの飢饉も高冷地は特にひどく、大秋山地群落も高冷地で、その被害は大秋山部落の五戸を滅亡するに至った。

考えてみると、尾の地区は、屋敷部落から一稔米ほども離れて、急傾斜地の処にあって、耕地も狭く痩せた土地であるとのこと、またここには水もなく、なぜこんな土地を選んで住み付いたのであろうか、と思われる。

堺村史等を総合して見ると、畑作地帯の農業で、樹木を伐り倒した後に、その土地を焼き払い、そこへ「そば」を播くと、そばは大変よくなるという。然し無肥料であるために、長続きはせず。数年で他の土地へ移動しなければならない。例え他の作物、粟や稗を作っても同様であろう。転々として耕地を変えていく。

まして大秋山は、屋敷部落（二十戸）と生活の共存は出来ず、中津川の溪谷。布石山の絶壁に追い込まれ足る狭い耕地であった。言えは掘立小屋というから、山から伐り倒した丸柱用材で家を建て、床もなく、野草で簡単な屋根を覆い、土間に敷草敷い

て焚き火で暖を取りその廻りに寝轉んでの生である。また食生活は、山野から採ってきた草木の類、特に栃の実等あれば貴重なものであろう。自然から得られるもの、然し生活環境は、傍らに屋敷部落が存在するので限られてしまう。

文政八年「秋山様子書上帳」箕作り村名主島田三左衛門の御用留によると、大秋山は五軒（十五人）矢櫃村は大秋山の谷底に二軒（四人）存在したが天明三年から四年にかけての飢饉で共に餓死するもののおびただしくついに滅亡という。

大秋山は天明三年前には八軒あり、焼畑訴訟文書で矢櫃村と争い敗北したという。

このように悲惨な状況に終わった大秋山も隣村の屋敷部落の好意により、「秋山先祖代々の墓」として、昭和十八年九月三十日屋敷村一同で慰霊碑を建立された他「秋山観世音菩薩」という碑が建立されてある。これは何れも大きな碑で明治以降のものと想われる。その他お地藏さん十体と石祠七体は無名で江戸時代のもではなかろうかと想像される。何れにせよ、大秋山の跡地に数多く建立されていることは、当時の盛衰を物語るものであり、また墓地であったかとも想像されるが、屋敷部落の信仰の厚さに感激し合掌してまいりました。